

第2章

全ての人のよい作業を

作業がある人は幸せ

- 人生を貫く作業がある
 - － 映画監督・新藤兼人, 女優・森光子
- 生涯現役
 - － 農業, 漁業, 職人, 作業療法士
- 趣味に生きる
 - － 華道, 茶道, コレクター, 映画, 旅行
- 生きがいがある
 - － 孫, 平和運動, 布教活動

作業とは、当事者にとって
意味のある活動のまとめ

作業は意味のある活動のまとめ

食事

トイレ

買い物

服を着る

化粧

診察

料理

- ご飯を炊く
- 肉じゃが
 - 材料を選ぶ
 - 切る
 - 煮る
 - 盛りつける

• 漬物

旅行

絵を描く

リハビリ

デイ

手紙を書く

環境が変われば言うことが変わる

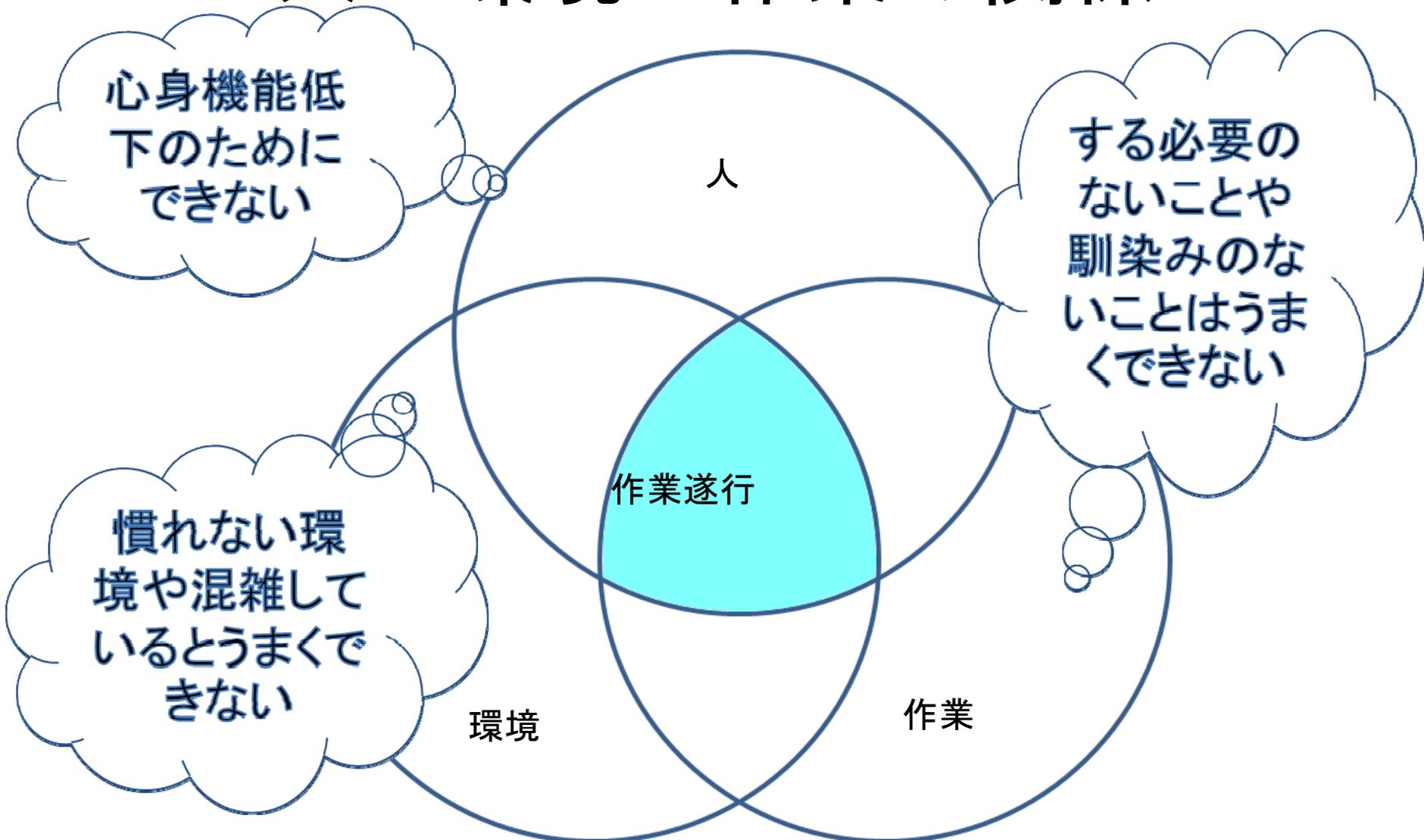
- スタッフが白衣やジャージを着ている
- 身体訓練機器が揃っている
- 高齢障害者だけが集まっている

この手が...
身体がよくなれば...

- 自分に似合う服を着ている
- さまざまな作業の道具や材料がある
- いろいろな場所に出かけたり, いろいろな人に出会う機会がある

これ何ですか...
実は私も以前...してたんです
よ

人—環境—作業の関係



別々に評価してもわからない

人

脳卒中右麻痺
失語症
ADL全介助

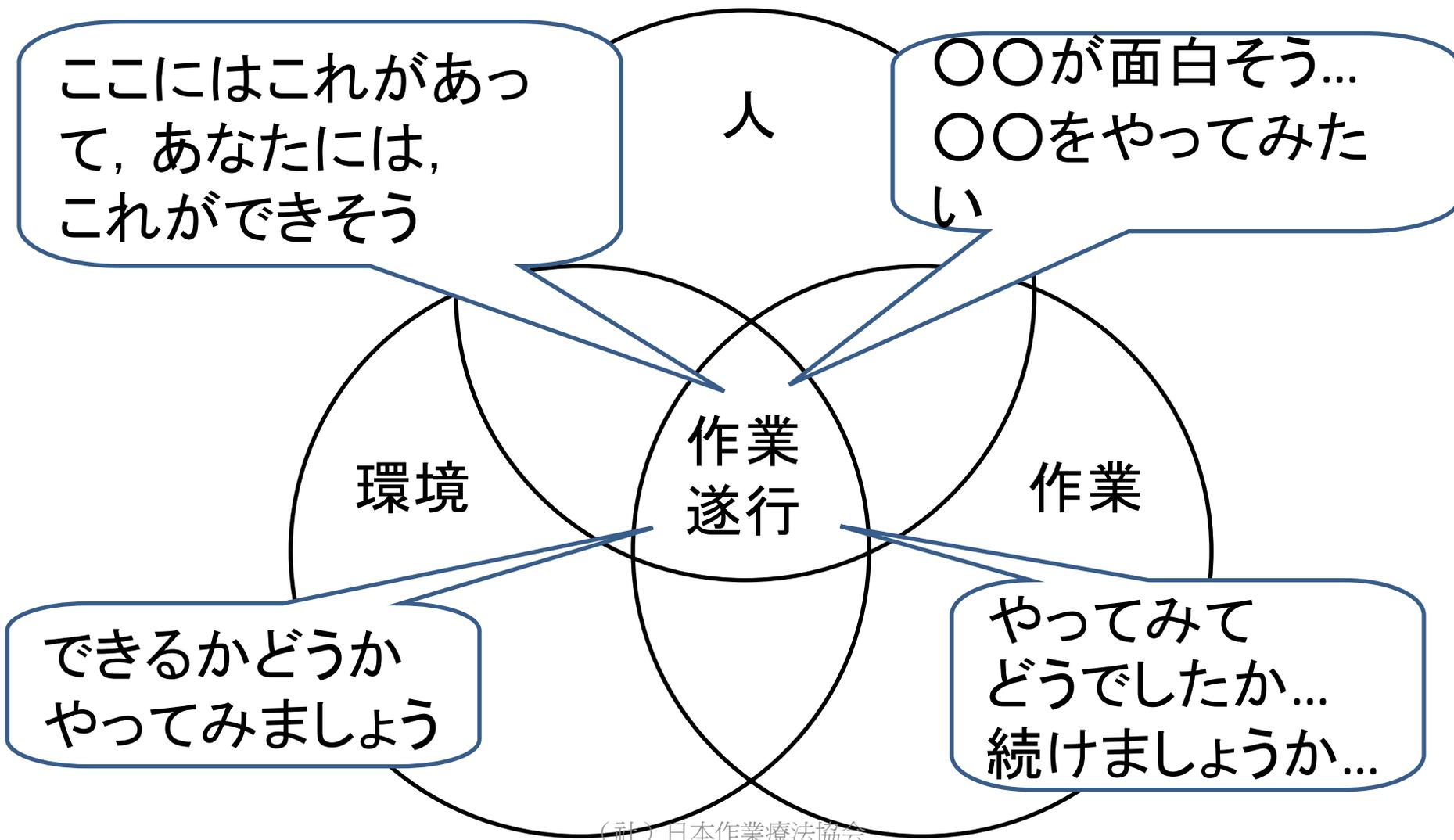
環境

妻と二人暮らし
二階建て持家
年金収入
友人少ない

作業

元事務職
旅行
読書

利用者と一緒に 何をしたら元気なるか探す



作業のやり方には幅がある

楽に，効率よく，
安全に，一人でできる

苦勞して，手間暇かかって，
危険で，援助が必要である

上手



下手

作業療法士が描く理想

全ての人が
作業を通して
充実した
健康な生活を送れる
社会



加齢に合わせて作業が変化

- ゴルフからグラウンドゴルフへ
- 社交ダンスからフォークダンスへ
- バレーボールからビーチボールバレーへ
- スポーツ選手から解説者へ
- 勤労者からご隠居へ
- メンバーからご意見番へ

経験を生かした作業ができる高齢期

作業療法の対象と役割の拡大

- 国際障害分類が国際生活機能分類へと改定された際に、分類対象が障害者から全ての人へと拡大
- どんな人でも慣れない作業や劣悪な環境では作業がうまくできない
- 加齢により心身機能が低下しても、生活の質を維持するためにはどんな作業ができればよいのか
- 認知症になっても暮らし続けることのできる環境はどのようなものだろうか
- 転倒や病気など将来の不安への対処法は何か、
- 人とのつながりを維持するための作業にはどんなものがあるか

日本社会の特徴を生かした戦略

- 競争的集団主義 → グループの活用
- 現実主義 → 理論はなくても平気
- 現在主義 → 今すぐ、ここで役立つことに注目
- 形式主義と主観主義 → そういうものだと思わせる仕組み作り、楽しければよい
- 外に対する閉鎖的態度 → 仲間になる

今、ここでできることに着目して、
達成感や満足感を生み出し、
周りの人たちと共に喜ぶ

まとめ

- 自分にぴったりの作業を見つけた人は幸せ。ぴったりかどうか知っているのは本人
- 生活は当事者の作業から成り立つ
- 作業とは、当事者にとって意味のある活動のまとめ
- 誰が(人)どこで(環境)何をする(作業)を合わせてみないと、うまくできるかどうかわからない
- 環境を変えてできるようになることが多い